

留学報告書 2016 年 3 月

Department of Computer Science, University of Oxford

五十嵐歩美

前回報告書からだいぶ日があいてしまいましたが、今までの経過について、時系列で振り返りたいと思います。

2015 年 7 月 – 9 月

昨年の夏は 3 年に 1 度開催される数理最適化分野の国際学会@ピッツバーグに参加しました。日本で所属していた学会でお世話になった先生方や友達にたくさん会えて楽しかったです。その後、イタリア・コモ湖近くで行われたサマースクールに参加しました。コモ周辺ののんびりした環境の中、現地の教会で 1 週間講義がありました。最初は驚きましたが、だんだんと雰囲気慣れてきて講義に議論に有意義な時間が過ごせました。内容的にも、修士のときの研究に役立つ話が聞けて、満足のいく滞在でした。

2015 年 10 月

2015 年 10 月からオックスフォードでは新年度が始まり、博士課程の学生 1 人とポスドク 3 人を新たにメンバーとして迎えました。去年は、指導教員の Edith とほぼ 1 対 1 の状態だったこともあり、ようやく研究室らしくなってきたと感じています。研究分野の近いメンバーで毎週ランチとセミナーをすることになり、彼らから多くの刺激を日々受けています。

2015 年 11 月

11 月はとても忙しい月でした。11 月の初旬に Transfer viva という、博士課程への準備期間の身分から正式な博士課程の学生になるための試験を受けました。1 年目の授業の成績、研究計画書、Term paper (ミニ論文) を提出した後、2 人の審査員が割当てられ 30 分~1 時間ほどの口頭試験をします。試験前はトイレに何度も行くほど緊張していましたが、実際の試験はとてもしリラックスしたものでした。緊張していた私を見て気をきかせてくれたのか、入室した直後に、試験官の 1 人が Would you like a tea? と聞いてくれました。試験自体も 30 分で終わり、とてもスムーズにいきました。1 年目の早い段階で自分のやりたいと思える具体的な研究テーマを見つけたことが大きかったと思います。

次に、指導教員と初めて書いた論文を AAMAS という人工知能の会議に投稿しました。私は修士まではコンピューターサイエンス (CS) ではなく、オペレーションズリサーチ (OR) というジャーナル重視の業界にいたので、会議録をどんどん出版する CS の文化に、軽いカルチャーショックを受けました。投稿締切り前の研究室の熱気は、卒論修論提出前のそれとかなり近いものを感じます。しかしそのような年に 1 回あるかないかの学位論文の締切りではなく、国際会議の締切りは年に何度もあります。指導教員を含む周りの皆が、どうやってこのサイクルをおよそ 2~3 ヶ月間隔でこなし 1 年に 5~10 本出版しているかは未だに謎です。

AAMAS 投稿締め切りの翌日に、フランスの Workshop で発表しました。投稿ギリギリの時間まで校正し、飛行機に飛び乗り、発表するというハードなスケジュールでした。ちょうど発表日に自分の誕生日も迎えました。

2015年12月 – 3月

めまぐるしく日々を駆け抜けていった10月・11月とは打って変わり、その後はじっくりと研究に集中できました。無事、11月に出した投稿論文も受理されました。興味のある方は目を通していただければ嬉しいです。

A. Igarashi and E. Elkind, “Hedonic games with graph-restricted communication,” AAMAS 2016, to appear.

3月初旬には、筑波時代の恩師の退官記念シンポジウムに参加するため、日本に一時帰国しました。上記の論文を発表して議論したり、昔話に花が咲いたり、とにかく楽しい研究発表会でした。

これから

オックスフォードに来てから早くも1年と半年近くが経ちました。生活面では、周りの会話がずいぶん理解できるようになったと思います。会話についていけずに愛想笑いでやり過ごすということは少なくなってきました(いまだに同僚のイタリア人のジョークは笑えないものの)。研究面では、以前は自分の実力以上に難しい理論的な問題に取り組もうとしていましたが、最近は「とりあえず今自分ができることをやろう」という気になっています。残りの博士課程の期間でどこまでできるかわかりませんが、これからもバリバリ研究頑張りたいと思います。